

「種をまく人」

～30倍、60倍、100倍～

マルコ4：18～20

私たちは物事をすべて理解しているようで、実は理解できていないことがあります。この茨のたとえはまさに今の社会の現状です。種(ロゴス)は「ことば」であり「意味」という意味があり、「ことばに意味がある」ということです。だから私たちが「意味がある」と思っていることに意味があるのではなく、「意味がない」と思ってしまうことに意味があるというのがロゴスの知識なのです。昔からあることわざや言い伝えには、今の私たちに「えっ?」というようなことが多いですが、その中には大事な言葉もあります。例えば「三つ子の魂百まで。」これは聖書の中でも同じようなことが言われています。だから聖書の奥儀にきちんと目をむける必要があるのです。私たちが目の前にあるものに対して、自分の基準で見て意味があると思うものに目を向けないでほしいのです。「内側に与えられた種」これが「意味」です。その種から私たちは人生の糧を得ていきます。そしてそこから何を蒔くかを確かめる必要があるのです。御言葉をまっすぐ聞いて蒔かれれば、私たちの口を通して良い種が蒔かれ、良い実になります。でもそれに「ズレ」が生じていたら、人々を裁いたり、自分の正当性を主張したりするために利用するようになってしまいます。これは本来の意味が欠落してしまっています。あなたはどんな種を蒔いていますか?平安をもたらす義の実ですか?それとも人々を惑わすまやかしの言葉ですか?良い種でも悪い種でも実を結んでしまいます。もし私たちが蒔いている種が、実を結んでしまったらまずいようなものなら捨てなければなりません。その時には意味があると思って蒔いても、実を結んだときにそれが本当に良かったかどうかわかります。「実を見て見分ける」のです。そして、一人の人が変えられ、その隣人にそれが流されていく…これが30倍、60倍、100倍の実が結ばれる理由です。だからこそ、「30倍、60倍、100倍」ということをよく理解することが大切です。

■ ① 30倍

30は「シャローシム」というヘブル語が使われています。聖書では創世記6:14, 15で初めて「30」という数字が使われています。これはノアの箱舟の記事です。ノアは箱舟を作るとき、人々に散々馬鹿にされました。しかし、実際に洪水が来た時、一番高い場所だったのが、この船の高さ「30キュビト」にあった船首だったのです。「底辺になったものが最も高くされる。(神の領域に用いる)」といったものにこの「30」が使われています。実際、イエス様が公生涯を始めたのは30歳、またヨセフも夢を解き明かしてパロに仕えるようになったのが30歳の時でした。「30」には「預言者、王、祭司」の存在が示されています。「30倍」は、救いをもたらす神の子であるゆえを指し示している。つまり「キリストにある成熟の実」です。私たちが一番「底辺」である時を乗り越えることを通して神様の時が来るということを理解する必要があります。「良い地」とは石を取り除き、痛みや苦しみ、悲しみが続くような作業をくり返した人の「恵み」です。だから蒔き時が満ちるまで種を蒔く必要があります。「聞いていることによく注意しなさい」(マル4：23)何を聞くか注意しないと大切なものが奪われます。その土地をたとえ非難されても「耕す」が「30」です。ノアはまさに神が「せよ」と言ったことを聞いて行ったのです。

■ ② 60倍

60は「シッシム」というヘブル語が使われています。「そのあとで弟が出て来たが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それでその子をヤコブと名づけた。イサクは彼らを生んだとき、六十歳であった。」(創25：26)ここに出てくるイサクは若き日に父に殺されそうになります。彼はそれに従おうとしました。イサクはイエス様のひな型として聖書に出てきます。一人の羊として犠牲になろうとしました。その彼に与えられた恵みが「子孫」です。その彼が「60歳」の時に、ヤコブ(イスラエル)が生まれました。「没業や乳香、貿易商人のあらゆる香料の粉末をくゆらして、煙の柱のように荒野から上って来るひとはだれ。見なさい。あれはソロモンの乗るみこし。その回りには、イスラエルの勇士、六十人の勇士がいる。」(雅3：6～7)ここはソロモン(イスラエルの王)が輿に乗っている様子が書かれています。ここでは「60人の勇士とともにいる」ということが表現されており、60倍という言葉は「イエスを王としてこれにつき従うイスラエルの民」が指し示されています。イエス・キリストが犠牲を払い、死にまで向かっていった時、それに「60の民」が与えられたということで、「犠牲の後に与えられた民」そんな意味があります。イエス・キリストの苦難の道を通して共に犠牲を払おうとする人々に神様は民を与えらるということなのです。

■ ③ 100倍

100は「メーアー」というヘブル語が使われています。「これはセムの歴史である。セムは百歳のとき、すなわち大洪水の二年後にアルパ

クシャデを生んだ。」(創11：10)ここはノアの長子セムのことが書かれてあります。彼も父ノアとともに箱舟に乗り、大洪水による滅びを免れました。その彼が大洪水の後、新しい地上でアルパクシャデを生んだのが100歳(メーアー)です。アルパクシャデの子孫エベルはイスラエル人の別称「ヘブル人」の由来で、彼の家系からアブラム(アブラハム)が生まれ、アブラハム自身も100歳の時に約束の子イサクが生まれました。「100(メーアー)」には「イスラエルの民の繁栄と祝福」が指し示されています。「イサクはその地に種を蒔き、その年に百倍の収穫を見た。【主】が彼を祝福してくださったのである。」(創26：12)この御言葉の通りです。「イエス・キリストの犠牲、その犠牲を耐え忍んで良い地になった人は30倍の実を結び、そして民を与えられる国家(イスラエル)が与えられ、このイスラエルが神に従おうとするとき100倍の収穫(繁栄)を得る」この表現が30倍、60倍、100倍という中に隠されているということです。「すると、ヨアブは王に言った。「あなたの神、【主】が、この民を今より百倍も増してくださいように。王さまが、親しくこれをご覧になりますように。」(IIサム24：3)「100倍の実を結ぶ」という表現には神のイスラエルの民に対する祝福及び約束の成就が示されています。「30倍、60倍、100倍の実を結ぶ」という表現には、王の王であるイエス、民としてのイスラエル、これらの存在によって地上に神の祝福がもたらされるという神の計画の完成が表されているのです。だからこそ聞くことに注意することが大切です。御言葉を聞くことが「秤」(マータド：測る、量る)ことにたとえられています。

■ 神の秤は2つ

(出16：15～18)ここは、聖書で初めて秤が用いられた箇所であり、エジプトから出て行った民が、おなかのすいたと言ったときに神様がマナを与えてくれた場面です。神はこれを集める量について民に命じて、民は「そのとおりにした」と聖書に書いてあります。ある人はたくさん、ある人は少しだけとりましたが、不思議なことにくらたくさんとっても余らなかったし、少なくとも足りないことはありませんでした。欲がある人もない人も結局一緒でした。聖書で最初の測り(マータド)はその量が自分の食べる分に応じたものだったのです。つまり、「人間的にどんなにやっても意味がない」ということです。イエス様は人々にたとえて話され、弟子たちにだけはすべてを解き明かしましたが、これは秤を使い、人々の聞く力を測られたのです。神様のはかりには目盛りは2つしかありません。「聞く」か「聞かない」かで、つまり「救い」か「滅び」かです。聞かないとすれば、それは自らが測ろうとするからです。「聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそい」私たちはこうなる必要があります。何を聞き、何を蒔くのか、そして何をすることも神の栄光を表すためであることを覚えておくべきです。だから何かが「ノー」と言われたら考える必要があります。その時、神の知恵を求めます。

さいごに

放蕩息子は、自分のために父を殺そうとしました。まだ父が生きているのに、財産を半分貰おうとしたのです。「このままでは死なないので、死んだこととして財産を分けてくれ」そう言ったのです。これは最低の行為ですが、父親を自分の利用のために殺そうとした彼の行為は、私たちがイエス様にしたことと一緒です。人々は自分のために彼を十字架にかけたのです。この放蕩息子は湯水のように財産を使い最後は、豚の世話をするようになりました。豚は当時、汚れた生き物とされていました。最も「底辺」に落ちた瞬間です。しかしその後、彼は「父のもとに帰ろう」と決め戻りました。これが「30倍」です。そして、父は息子を受け入れて赦し、祝宴を開きました。これが「60倍」、そして繁栄が「100倍」です。放蕩息子の兄はこれを見てさばきました。まじめに生きたクリスチャンの裁きです。兄も弟もどちらも同じ「罪人の頭」です。もし今、道を外し聞く耳を失い、十字架を掛けてまでも自分の幸せを得るために何かを得ようとしているのなら、それは「帰ろう」と30倍の地を選ぶべきです。そして兄のようにもし、イエス様のそばに居るからといって自分をあたかも立派な人のように見誤り人々を裁く視線をもっているのならそれを捨てて彼と共に十字架に架かる犠牲を選ばなければ良い地になれません。私たちには測る秤はありません。そして、神様の声に聞き従うものには繁栄を約束されています。目の前の事を自分の秤で測らず、神様の声に聞き従い、神様の計画を完成させるものになっていきましょう。

(要約者：岩崎祥誉)

(2020年3月15日)